

# 手風琴

小川未明

青空文庫



秋風あきかぜが吹きはじめると、高原こうげんの別荘べつそうにきていた都の人みやこひとたちは、あわただしく逃げるにように街へ帰かえつてゆきました。そのあたりには、もはや人影ひとかげが見えなかつたのであります。

ひとり、村むらをはなれて、山の小屋やまこやで寝起きねおきをして、木きをきり、炭すみをたいていた治助じすけじいさんは自然しぜんをおそれる、街の人まちひとたちがなんとなくおかしかつたのです。同じ人間おなじにんげんでありながら、なぜそんなに寒い風さむいかぜがこわいのか。それよりも、どうして、この美しい景色けしきが彼らの目めにわからないのかと怪あやしまれたのであります。

「これからわしの天地てんちだ。」と、じいさんはほほえみました。

石いしの上に腰うえをおろして、前方ぜんぽうを見ていると、ちようど、日ひが

あちらの山脈さんみやくの間あいだに入はいりかかっています。金色こんじきにまぶしく  
ふちどられた雲くもの一団だんが、その前まえを走はしっていました。先頭せんとうに旗はた  
を立て、馬うまにまたがった武士ぶしは、剣けんを高くたか上げ、あとから、あと  
から軍勢ぐんせいはつづくのでした。じいさんは、いまから四十年ねんも、  
五十年ねんも前の少年しょうねんの時分じぶん、戦争せんそうごっこをしたり、鬼おにごっこ  
をしたりしたときの、自分じぶんの姿すがたを思い出だしていました。

やま  
山やまへはいりかかった、赤あかい日ひが、今日きょうの見取みおきめにとおもって、  
はんぶんかお  
半分はんぶん顔かおを出だして高原こうげんを照てらすと、そこには、いつのまにか真ま  
つかいろ  
紅つかいろに色いろづいた、やまうるしや、ななかまどの葉はが火ひのように点てん  
々んとしていました。

紺碧こんぺきに暮くれていく空そらの下もとの祭壇さいだんに、ろうそくをともして、

祈りを捧げているようにも見られたのです。

「よく剣ヶ峰が拝まれる。」と、じいさんは、かすかはるかに、千古の雪をいただく、鋭い牙のような山に向かつて手を合わせました。

それから、治助じいさんが、自分の小舎にもどつて、まだ間がなかつたのでした。どこからか、風におくられて手風琴の音がきこえてきたのでした。

「まだ、別荘にいる人たちでもあるかなあ。」

じいさんは、耳を傾けました。それにしてはなんとなく、その音は、真剣で悲しかったのです。

そのとき、小舎の入り口に立ったのは、破れた洋服をきて、

かばんを肩かたにかけ、手風琴てふうきんを持った色いろの黒くろい男おとこでした。

「見たみことのある人ひとのようだな。」と、じいさんが男おとこの顔かおをながめていいました。

「村むらへ、二、三度どきたことがあります。田舎いなかをまわつて歩あるく薬くすり売うりですよ。」

「ああ、薬屋くすりやさんか、すこし休やすんでゆきなさい。」と、じいさんが男おとこを小舎こやの中なかへいれました。

男おとこは、この村むらへはいつてくるのには、いつも、あちらの山やまを越こえて、しかも、いま時分じぶん、高原こうげんを通とおつてくるのだということをはな話はなしました。

「どんな、薬くすりを売うりなさるのだ。」

じいさんがきくと、男は、いろいろ自分の持つてゐる薬について話したのです。

「私が、命がけで山に登って採った草の根や木の実で造つたもので、いいかげんなまやかしものではありません。一本のにんじんをとりますのにも、綱にぶらさがつて、命をかけています。またこのくまのいは、自分が冬獵に出て打つたもので、けつして、ほかから受けてきたものでありません。だから、この薬を飲んでできないことはない。私は、うそをいったり、偽つたりすることができぬ性分です。病氣になつて苦しんでゐる人たちに、わかりもしないめつたのものをやれましようか。いまは、人をだましても悪いと思わなければ、飲んでその薬がきかなくて死んでも、

どく  
毒にさえならなければかまわぬといった世よの中なかです。私の親父おやじも  
くすりと  
薬取りでした。そして、命いのちがけで取とつて薬くすりを売うつて歩あるいて、一  
しょうびんぼう  
生を貧乏おくで送おくりました。私も子供わたくしの時分こどもから山やま々やまへ上あがつて、  
どこのがけにはなにがはえているとか、またどこの谷たににはなんの  
くささ  
草が、いつごろ花はなを咲さいて、実みを結むすぶかということをよく知しつて  
いました。親父おやじは、薬くすり売うりは、人ひとの命いのちにかかる商しょう売ばいだから、  
めつたなもものを持もち歩あるくことはできない。自分じぶんで採とつて造つくつたも  
のなら安あん心しんして売うることができるといっていましたが、私わたしが、  
また死しんだ親父おやじの後継あとつぎをするようになりました。この手風琴てふうきん  
も親父おやじが持もつて歩あるいたものです。」

じいさんは、変かわつている男おとこだと思おもいました。町まちの薬屋くすりやへゆ



けば、このごろどんな薬くすりでも他の町まちからきている。そして、光ひかつたりつばな容器ようきの中なかにはいつて、ちゃんと効能書こうのうがきがついていいなる。田舎いなだつて、もうこうした売薬ばいやくは、はやらないだろうと思おもいました。

「こうして、歩あるきなさつて、薬くすりが売うれますかい。」と、じいさんは、ききました。

「偽物にせものが安やすく買かわれますので、なかなか売うれません。薬くすりばかりは、病びようき気きになつて飲のんでみなければわからないので、すぐに本ほん物ものとは思おもつてくれないのです。」

「都みやこにゆくと、たくさん、大おおきな工場こうばがあつて、どんな病びようき気きにもくすりく薬くすりをいろいろ造つくつていはなしという話はなしだが。」

「おじいさんは、そんな薬くすりを信用しんようなさいますかね。」

「さあ、私わたしは、じょうぶで薬くすりを飲んだことがないからわからないが。」

男おとこは、さびしそうな顔かおをして、もう、まったく暗くらくなってしまうた、暮くれ方がたの空そらを見上げました。

「おじいさん、この小舎こやのすみに一ひと晩ばん泊とめてくださいますまいか。」と、頼たのみました。

「ああいいとも、これから里さとへ出るにはたいへんだ。」

その晩ばん、二人ふたりは、炭すみをたくかまどのかたわらで語かたり明あかしました。夜風よかぜが渡わたると、降ふるように落おち葉はが、小舎こやの屋根やねにかかりました。夜よが明あけて、男おとこが出でかけるときに、

「もしおじいさん、腹はらでも痛いたんだりしたときに、これをおあがんなさい。」と、黒くろい色いろをした薬くすりをすこしばかりくれました。

「なにかな、これは。」

「くまのいんです。このくまは大きおおなやつでしたが。」

「こんな高たかいもの、私わたしはいらんが。」

「いくら達たっしや者ものでも、人にんげん間は病びようき気きにかかるものです。また来ら

年いねん、来らい年ねんこなければ、明みよう後ご年ねんやってきます。もし、こなけ

れば、綱つなでも切きれて、がけから落おちて死しんだと思おもってください。」

と、男おとこはいいました。

「じゃ、おまえさんたっしやも達たっしや者もので。」と、じいさんは、別わかれを告つげ

ました。

秋草あきくさの咲さき乱みだれた高こう原げんを、だんだん遠とおざかつてゆく、手て風琴ふうきんの音ねがきこえました。

「変わった薬屋くすりやさんもあつたものだ。」

じいさんは、働はたらきながら、男おとこのいつたことを思い出おもしていまし  
た。それには、真まこと理りがありました。かわいい孫まごが腹はら下くだしをして、  
わずか二日ふつかばかりで死しんだのであつたが、せつかく買かつてきた薬くすり  
がなんのききめもなかつたのが思い出おもされましました。

「あのとき、このくまのいがあつたら、たすからないともかぎら  
なかつた。」

じいさんは、男おとこが残こしていつた、紙かみに包つつんだくまのいをおしい  
ただいて、帯おびの間あいだにしまいました。坂さかに、一本ほんの山やま桜ざくらがあつ

て、枝えだが垂たれてじいさんの頭あたまの上うへにまで伸のびていました。

今年ことしの葉はは、もう散ちつて、枝えだは裸はだかになつていたけれど、葉はの落お

ちたあとには、来らい年ねん咲さく花はなのつぼみが、堅かたく見みえていました。

じいさんは、それを見みると、花はなが咲さくまでに、すさまじいあらし

と雪ゆきの時じ節せつを經へなければならぬのだ。しかし、この若わか木ぎは、無ぶ

事じにそれをしので、いくたびも春はるを迎むかえて、麗うるわしい花はなを開ひらくで

あろう、が、こう年としをとつた私わたしは、はたして、もう一ど度ど、その花はな

が見みれるだろうかと思おもつたのでした。しかし、良りよう葉やくをもらつ

て、その考かんえが変かわりました。じいさんは、にこにことして、急きゆう

に仕し事ごとをするのに張はり合あいができたのでした。

「変かわつた葉くすり屋やさんだ。信しん心じんするので、神かみさまが葉くすりをおめぐ

みくだされたのかもしれない。」

じいさんは、まだどこかに手風琴てふうきんの音がきこえるような気がして、耳みみをすましていました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1933（昭和8）年9月

※表題は底本では、「手風琴《てふうきん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 手風琴

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>